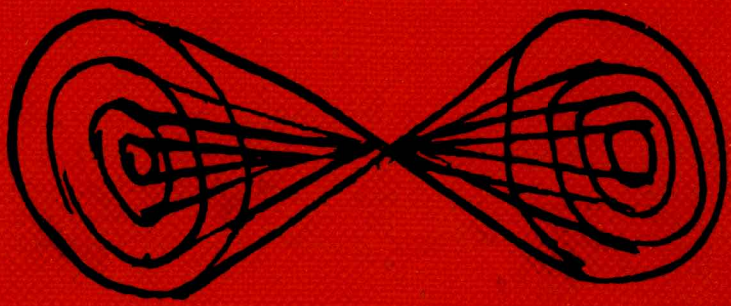

世界文学序説

中野好夫訳

世界文學大系

世界文学大系 別巻 *1*

世界文学序説

昭和36年5月25日発行

定価450円

訳　者　中野好夫
発行者　古田晁
印刷者　山元正宜
発行所　株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 165768　電話（291）局7651

目次

世界文学序説

中野好夫訳

第一部　世界文学とは何か　5
第一章　世界文学の成立　7
第二章　翻訳——欠くことのできない道具　17
第三章　文学の宝庫　27
第四章　文学の聖書　42
第五章　民間伝承と文学　52
第六章　趣味の伝記　69
第七章　文学の本質　87
第八章　詩と散文　104

第二部　思潮・ジャンル・時代　117
第一章　文学の思潮　119
一　古典主義と浪曼主義　二　写実主義と象徴主義
第二章　文学のジャンル　145
一　ジャンルの理論　二　抒情詩
三　叙事詩とロマンス　四　歴史と小説
五　演劇

第三章　文学における時代　242
一　時代の理論　二　時代の概観
第三部　世界文学の諸問題　279
第一章　社会的考察　281
一　民族・環境・時代　二　作者と読者
三　社会への抗議——芸術のための芸術
第二章　批評の問題　345
要約　367
付録　小説のさまざまの型　390
解説　中野好夫　395

装幀　庫田　叡

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

アルベール・ゲラール

世界文学序説

第一部　世界文学とは何か

第一章　世界文学の成立

名づけ親ゲーテ

〈世界文学〉という表現はゲーテにはじまる。ぼくたちがこれからやろうとする作業の監督者として、おそらくこれ以上ふさわしい高貴な人物はない。ゲーテこそは彼が命名した〈世界文学〉という概念の完璧（かんぺき）な実例だった。彼の精神を定義づけることはぼくたちの主題を定義づけることにひとしいだろう。彼はドイツ文化のすぐれた代表者であり、しかも同時に、自分の民族の政治的・言語的境界のかなたを見わたすことのできる人物だった。すべて人間に関することは彼に無縁ではない。彼は全人類の遺産を自分が受けつぐべきものと考えていた。彼は古代ギリシア、ローマの傑作を楽しむのと同じように、近代フランス、イタリア、スペイン、イギリスの傑作を楽しむ。東洋と西洋とふたつの文明のあいだの断絶に彼は橋をかけようとさえした。どこへ行っても彼はその家の息子のように自由にふるまう。彼の『ハムレット』解釈は、イギリスの批評家たちが幾世代ものあいだほとんど無条件に受け入れるほど説得力に富んでいた。彼は惜しみなく摂取し惜しみなく与えた。全ヨーロッパを彼は自分の読者として持つ。少なくとも二度、つまり初期の作品である挫折と絶望の物語『若いヴェルテルの悩み』と、力強い哲学的なドラマ『ファウスト』の第一部において、彼は学問的あるいは批評的な関心のある人々だけではなく大衆を読者に持った。死に先立つ数年間、彼は疑問の余地なくヨーロッパ文学の首長の位置にあった。彼の国ドイツにはその後、彼がかかげた理想とはおよそ無縁な多くの予言者があらわれたけれども、ワイマールに輝いたこの精神は現代の不安や混乱をこえて生きのこるだろう。

子供部屋ではじまる

しかし、ゲーテがぼくたちの師だと述べることはいささか危険をともなうかもしれない。世界文学というのは怖いもので、ゲーテのような教養の巨人（あるいは少なくとも学識に富んだその弟子）でなければ近寄れないと思いこむ危険がある。この伝でゆけば宗教は聖パウロや聖アウグスティヌスや聖トマス・アクィヌスやマルティン・ルター、およびその後継者たる職業的神学者だけの独占物になってしまう。しかしぼくたちは、宗教が理論ではなく普遍的な体験であり、普通の人間にも拒まれていないものであることを知っている。世界文学についてもおなじことがいえるだろう。それは高慢な選良、哲学者、気取った世界市民のためだけにあるのではない。ぼくたちはみんなすでに世界文学を読んで楽しんでいる——モリエールの喜劇に出てくる町人貴族ジュルダン氏が、自分ではそれと知らないまま、生まれたときからずっと散文をしゃべっていたのとおなじように。世界文学は大学院においてではなく、子供部屋においてはじまる。子供たちはとお

い昔から伝わる物語、すべての時代とすべての風土の童話をきかされている。彼らはグリム兄弟がドイツ人だからといって反感をもったり、シャルル・ペローがフランス人だからといって不服をいったり、アンデルセンがデンマーク人だからといって不満を持ったりはしない。こうした度量のひろさは彼らが子供部屋を卒業するころになっても失われない。『スイスのロビンソン』、『アルプスの山の娘』、『ピノッキオ』などは星条旗のもとに生まれはしなかったけれどもアメリカの子供たちのお気に入りだ。あのたくましい、陰欝な、巨大な物語作者アレクサンドル・デュマの『三銃士』や『モンテ・クリスト伯爵』に若い世代はよろこびを見出だす。ジュール・ヴェルヌの未来像はすでに時代おくれになったはずだが、若者たちはいまなお彼の作品を耽読している。

自分の愉しみを　普通の人はいわゆる立派な教育（つまり悪い教育）をうけないかぎりこうした自由な態度で世界文学を読みつづけてゆく。おとなでも普通は文学における国境にはまったく無関心だ。寂しい小屋で読むためのただ一冊をえらぶとすれば、だれしもあの異様な美しさと神聖な知恵がみちあふれている本、ただ一冊のなかに限りなく広汎なものを蔵している図書館、すなわち『聖書』をえらぶ。これは異国の空の下で異国の言葉をしゃべりながら生きた人々の手から、幾時代をへてぼくたちにまで伝えられた書物だ。十九世紀にも普通のひとはウージェーヌ・シューのロマンス『パリの秘密』、『さまよえるユダヤ人』などを感激して読んだのだし、現在でも大学教育の恩恵なしに、救済と社会的憐憫を主題とするヴィクトル・ユゴーの叙事詩『レ・ミゼラブル』を楽しんでいる。いわゆるベスト・セラーズは、大学の宿題としてではなく自分のよろこびのために読むものだが、そのなかには多くの外国生まれの作品がふくまれている。たとえばシェンキェヴィッチの『クオ・ヴァディス』、ブラスコ・イバーニェスの『黙示録の四騎手』、ルートヴィヒの『ナポレオン』、レマルクの『西部戦線異状なし』、ヴィッキー・バウムの『グランド・ホテル』、ファラダの『貧しい男――今度は何を？』など。だから普通の読者にとって、世界文学とは特別な理論ではなく、ごく当り前の状態なのだ。

古典、永遠のグッド・セラーズ　文学についての知識が広くなるにつれ、ますますはっきりわかってくることがある。それは、人間がいままでに考え、書いた最上のことは、混迷におちいっているぼくたちの世代や、ぼくたちの趣味や、簡潔にして多彩なアメリカ語の範囲内だけにあるのではない、ということだ。ぼくたちはこんにちのベスト・セラーズだけではなく、永遠のグッド・セラーズをも意識するようになる、それは古典と呼ばれるものだ。ある日ホメロスがぼくたちの視界のなかへ泳ぎつき、ダンテの『神曲』、ゲーテの『ファウスト』、トルストイの『戦争と平和』が訪れてくる。ぼくたちが人間の到達した絶頂であるこれらの作品を無視したり、軽視したりすれば、自分の精神の成長をさまたげることになろう。しかもこのことは、数時代も前に名声を獲得した古典だけについていえるのではな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

い。現代文学にほんとうに関心をもつ人ならば、誰でもアナトール・フランスやマルセル・プルーストやピランデルロに、ダヌンチオやゴーリキーやメーテルリンクに、アンドレ・ジイドやトーマス・マンやウナムノに、ジュール・ロマンやシュテファン・ツヴァイクやオルテガ・イ・ガセットに親しむべきだろう。

常に最上のものを　上述したような平明な事実から一つの平明な結論が引き出せるだろう。すなわち、文学は英文学として教えられるべきではなく、英語で書いてある文学として教えられねばならぬ。もちろん選択は必要だが、それは作品の質を基準としての選択でなければならない。世界の傑作を知ることは、一地方の凡庸な住民たちの名をおぼえて頭をごちゃごちゃさせることより、はるかに大切なことだ。そして、生涯にわたる自己教育の期間を通じて、ただひとつの規則を守ることが賢明だろう。ぼくたちは常に、最上のものを――たとえ、それがどの国の作品であろうと、常に最上のものを読み、そして楽しむことにしよう。

区分の由来　この簡単な提案は、ある種の読者たちに、いいかげんなパラドックスにきこえるかもしれない。ぼくたちは、英語、古典語、近代語、歴史、哲学などというかなり厳重な分類に馴れている。そして、こういう伝統ある境界区分を破壊することは大それた異端のように、立憲国における司法、立法、行政の三権分立を混乱することのように感じられる。しかしぼくたちはまず何よりも、こういう「伝統ある」区分はごく最近のものだということを銘記しなければならない。長い歴史をふりかえってみると、厳重に国別というやり方で文学を研究するのはつい昨日はじまったことだ。幾世紀もにわたって採用されていた研究法は、人文学（ヒューマニティーズ）すなわちギリシア、ローマの古典をとおしておこなう方法だった。ぼくがフランスの中学生だったころは、同じ教師が一人でフランス語、ギリシア語、ラテン語を教えた。つまり、三つのもので一つの全体を形づくっていた。この長い伝統は消えかかっているが、まったく失われてしまったのではない。現在なお、アメリカでこれほど広くラテン語が学ばれているのは、実用的目的のためでも、その本来的な価値の大きさのためでもなく、ラテン語がぼくたちの文化の軸になっているからだ。もはやラテン語は諸国民をつなぐ不可欠の絆（きずな）ではないだろうが、しかし、ヨーロッパという精神的統一体を破壊することは悲劇的な損失だ、という考え方に反対する者はいないだろう。

専門化と自分の領域　文学をその書かれた国語で分類してしまうやり方を擁護するものとして、明確な知識を手に入れるには専門化が必要だという考え方がある。たしかに、一国の文学を正確にそして親しく知ることは、それが自国の文学のばあいでもけっしてやさしいことではないし、世界の文学全体を自分の領域として引き受けることは、天才にとっても不可能事だろう。そのような試みは、せいぜい普遍化という美名にかくれた浅薄化をもたらすだけだ。ハーヴァード大学のC・H・C・ライト教授のユーモラスな言い方を借りれば、世界文

学の研究は「神にもH・G・ウェルズにも遅れをとるまいとするせっかちな試み」に終わりやすい。

だから、世界文学というのは危険なことにはちがいないが、けっして根本的な不可能事ではない。百科全書的な天才の時代は終わったという職業的学者たちの意見にはぼくは賛成だが、しかし実状としては、現在では科目別の分類よりもずっとはなはだしい専門化が要求されている。一国の文学をすべてにわたって知ることはなるほど不可能だろう。『ベーオウルフ』とジェイムズ・ジョイスの双方について（これは巨大な鎖の両端である）自分で直接に研究して権威となることは、誰にだってできない。どうしても選択、放棄、そして無知の告白が必要になる。ぼくたちはゆらめく焔を手にして小さな環のなかを歩いてゆく。その環のそとには、まず僅かばかりの薄暗がりがあり、次いで絶対的な暗黒がある。

国家と伝統

しかしぼくたちは、ひどく狭い分野を研究するさいであろうとも、かなりよく探究しようとするかぎり、国家という境界のなかにそれを押しこめることはできない。英米のあらゆる偉大な文学者は、精神上の祖先として誰か外国人を持っているし、それは彼の芸術や思想を形づくるうえで、英語で書いた先輩や英語で書いている同時代人よりも、はるかに重要な存在なのだ。チョーサーの用いた題材のフランスおよびイタリアにおける出所を知らなければ、チョーサー学者にはなれない。ミルトン研究家はヘブライ、ギリシア、ラテン、およびイタリアの文学をいくらか覗く必要がある。これはぼくたちが生きている暗欝な国家主義の時代についてもいえることだ。モーパッサンの影響を知らなければアーノルド・ベネットをよく理解することができない。ポール・ブールジェを知らなければイーディス・ウォートンが、チェーホフを知らなければキャサリン・マンスフィールドが、アナトール・フランスを知らなければJ・B・キャベルが、イプセンとヴォルテールを知らなければバーナード・ショーがわからないのだ。

しかし、外国の影響はただ国家的伝統を修飾するものとして働くだけで、その伝統は根本的な要素として残る、ということは認めなければならない。ヴォルテールのようなイギリス崇拝者でさえもついにフランス人なのだし、ギボンのような親仏家ないしフランスかぶれでも、やはり骨の髄までイギリス人なのだ。一人の人間ないし一つの国民が、一組の用語、一つの原理、一つの技術、そしておそらくは思想や感情の新しい陰影を借用することはあるだろう。文学史上、バイロンのヨーロッパ大陸における成功ほどドラマティックなものはないだろうし、詩人たちは至るところで自国の巨匠たちを見捨て、名声赫々たるイギリスの反逆児に従ったのだが、しかしバイロンがあれほどの成功をおさめたのは、ヨーロッパ大陸がそれ以前にルソーによって、ゲーテとシラーのきわめて初期の作品によって、シャトーブリアンによって、バイロニズムの段階に自主的に到達していたためだった。

しかしこのことはただ、あらゆる偉大な文学はほとんど同じ時期に酷似した局面を通りすぎるという事実を示すだけだ、と

考えることもできよう。だがそれはまた、ヨーロッパ文化という統一体を強調することにもなる。この統一体の内部には二組の相違点が存在する。第一のものは歴史的なもので、それは〈時代〉という現われ方をし、第二のものは地理的なもので、それは諸〈国家〉を分断する。

時代精神　この二組のなかでは、国家のほうがきちんとした法律上の存在だという有利性をもつ。誰でも一つの国家に所属するよう登録されているのに反し、時代精神とは影のように淡い君主にすぎない。だからぼくたちは、たとえばエドマンド・スペンサーを〈たまたまイギリスに生まれたルネッサンス人〉としてよりも〈ルネッサンスのイギリス人〉として考えがちだ。しかし文化の領域においては、時代は国家よりも実際はもっと現実的でもっと重要な因子であろう。たとえば啓蒙時代というような、ある特定の時期におけるヨーロッパ各国の精神のあいだには、中世イギリス人とその子孫であるヴィクトリア時代中期のイギリス人とのあいだにおけるよりもはるかに大きな類似がある。古い肖像画を見るばあい、ぼくたちがまず意識するのはそれが所属していた時代だ。描かれている人物の国籍をさぐるには、もっと仔細な検討を要する。そして服装におけるファッションと同じように、表現におけるファッションや思想におけるモードもまた全西洋世界を風靡する。それゆえ、詳細な研究にふさわしい単位は、国家というグループであるよりはむしろ、文明のある局面——たとえば浪曼派の反逆とか、リアリズムの反動とかいうものとなろう。

階級・階層　それにぼくたちはまた、少なくとも第一次大戦前のヨーロッパにおいては、国境よりももっと強固なものとして階級の差別を考慮に入れる必要がある。というのは、国境はこんにちでこそはっきりと引かれているけれども、長いあいだ不明確なものだったからだ。現在のぼくたちから見ると、封建的な無秩序の残滓（ざんし）として目に映ずるものは、古典主義の時代にも生き残り、フランス革命ののちにさえも尾を引いていた。たとえばアルザス地方はフランス王の支配下にあると同時に、またいろいろの点で神聖ローマ帝国と結びついたままになっていた。今から百年前には、ニューシャテルはプロシア公国の領土であると同時にスイス共和国の一部だった。そして貴族階級の一員は、国家に対する忠誠という点でためらうことがあっても、自分の地位や、平民と自分のあいだのはなはだしい距離については、いささかも疑念をいだかなかった。こういう心のあり方の痕跡はこんにちでも見出だすことができる。戦場ではあらゆる階級の者が、王のため国家のため、同じようにヒロイックに闘うだろう。しかし戦争が終われば、貴族は自分の娘を、自国の下層民とよりはむしろ外国の貴族と縁組みさせるだろう。

　このような条件は文学にも無関係ではない。上流階級の人士は同じ種類の生活をしているから、同じ種類の芸術をいたるところで享受することになる。十二世紀後半における騎士道ロマンスの巨匠クレティヤン・ド・トロワは、洗練された恋愛のパターンを全ヨーロッパに供給した。十六世紀初期においては、

バルダッサーレ・カスティリオーネがその『廷臣論』で、イタリア人のためにだけではなく、イギリス人やフランス人のためにも、理想的な貴族の姿を描いてみせた。ルイ十四世およびルイ十五世の治下におけるフランス文学の全欧風靡は、単にその古典的な完成のせいだけではなく、まずなによりも、ヴェルサイユ宮殿とパリのサロンの社会的威信によるものであった。

一方、一般民衆もまた曖昧な国境を越えて、同じ種類の人々とまじりあった。彼らは、市場や縁日や巡礼の旅で、教訓的ないし諷刺的な物語を物々交換した。この結果、交通機関が不便でじつに危険だったあの時代においてさえも、狭い地方主義は成立しなかった。民衆の叙事詩『ルナール狐』があれほど広くゆきわたっているのはなぜか、じつによく似た愉快な物語や笑劇（ファルス）が、明らかに内地産で本場特有の味がありながら、しかもあらゆる国に見出だされるのはなぜか、という理由はこれでわかるだろう。キリスト教世界全体が同じ社会構造から成り立っている一つのピラミッドであった時代が、かつてはあったのである。

しかしぼくたちは、これらの層のあいだの断絶をあまり強調しすぎてはいけない。かなりの量の相互滲透はどうしてもある。貴族たちは、そして貴婦人たちでさえも、庶民の粗野なユーモアをおそらくは楽しんだようだし、下層民たちは常に上流階級という魅惑にみちた存在に憧憬をよせた。それゆえ、さまざまの階級文化のあいだには薄明の地帯がある。ちょうどラテンとチュートンという二つの激突する世界のあいだに中間地帯――ベルギーとスイス――があると同じように。しかしそれにもかかわらず、社会的な階級は、国家よりももっとはっきりした力を文学に対してふるってきたのだ。

政治と言語　もし国家が政治上の単位にすぎないならば、ぼくたちの論証はこれで終わることができるかもしれない。しかし国家という概念は複雑だ。理想的にいえば、国家とは同じ主権の下にあり同じ言葉を話す一つの地域的単位でなければならない。スイスのように、さまざまの国語を話す一つの純粋な国家は、いわば奇蹟的な例外である。

しかし、言語的境界と政治的境界との完全な一致などというものはどこにも存在しない。ドイツ国内には今なお多数の非ドイツ人がいるし、ドイツ国外には多数のドイツ人がいる。英語をしゃべる世界は二つの国家に分れているし、スペイン語世界は二十の国家に分れている。「一にして分ちがたい」という意識的国家の典型のようにいつも考えられているフランスですら、本国の国境のなかでさえも言語的統一を強制しなければならない。おそらく、あらゆる国家が今なお形成途上にあるという理由によって、国家意識はいたるところでこれほど強烈なのだ。

国語によるグループ　文化の視点から見れば、〈国語によるグループ〉と一致しないばあい、前者ははるかに重要な要素となる。実際、いわゆる「その国の文学」をぼくたちが研究するとき、厳密な政治的区分は無視されるのが通例だ。ジャン・ジャック・ルソーがジュネーヴの市民だからといって、彼をフランス文学から除

外する者はいない。ドイツが幾百の公国に分れていたときも、ドイツの文学は一つであったし、しかも偉大だった。オーストリア人グリルパルツァーがドイツの作家になるためには独墺合併を待つ必要はなかったし、スイス人ゴットフリート・ケラーは精神においてドイツ人だった。もしアメリカが無血革命以後のすべての偉大なイギリス作家を外国人あつかいにする日が到来したら、それはアメリカにとって災厄の日となるだろう。

〈国語〉は文学研究のためのもっとも自然な単位ではない、〈時代〉や〈階級〉、さらにまた〈主題〉や〈ジャンル〉がよりよい骨組みを提供するだろう、とぼくたちは主張することができる。しかし言語の相違は世界文学の実現を、ほかの芸術やほかの学問におけるよりもずっとはなはだしくさまたげている。数学者や化学者も言語のちがいには迷惑しているだろうが、彼らの用いる基本的な記号は普遍的なものだし、スウェーデンやイタリアの研究論文はアメリカの実験室で正確に照合されているのだ。外国の絵画、彫刻、ことに音楽に接するばあいは、ときとして特別な用意がいることはあっても、そうした諸芸術の約束（コンヴェンション）事は、世界共通ではないにしてもともかく全ヨーロッパ的なものだ。中国の音楽はぼくたちに無意味ときこえるかもしれない。しかしぼくたちはドビュッシーやシベリウスを理解するには翻訳を必要としない。ところが知らない国語で書かれた最良の本は、この上なく感受性のゆたかな人にとってさえも死せる書籍なのだ。

この困難を全面的に克服することはできない。世界語はあまりにも遠い可能性だし、もし実現しても益があるかどうかを多くの文学愛好者たちは疑っている。*ぼくたちは自国語という境界のなかにとじこめられているし、それは二つの敵対国のあいだの国境よりももっと堅固な障壁なのだ。しかし世界文学は存在する。ドイツはシェイクスピアを知り、イギリスはゲーテを知っている。克服しがたい障害のように見えるものに対するこの勝利ほど――たとえそれがどのように不完全な勝利であろうとも――ヨーロッパの統一体制を力強く証明するものはない。

＊　この反対意見は〈世界〉語に対するものであって、中間的な国際補助語への反対ではない。

文学の通商・探検家　いつの時代にも、商人とか外交官とか、国境を越えることが仕事である人々がいた。彼らの多くが文化に対して全面的に鈍感だったわけではないが、文学的交流についての彼らの力はさほど大きなものではなかった。しかし貴重だったのは、国境という障害をものともしない彼らの冒険心だ。彼らの数は、あらゆる時代、あらゆる国に、いつも同じように多かったわけではないし、いつも同じように成功していたわけでもない。平静な自己満足の時代には、大勢順応と伝統とが勝利を占める。ボワローはイタリアおよびスペインの作家について多少知っていたけれども、彼らを軽蔑していた。彼にとって北方の文学はキンメル族の住む国の暗黒のなかにあった。古典主義的な明るい光を浴びていないすべてのものは、彼の眼中になかった。しかし、やがていつまでもつづく大勢順応が退屈なものになり、自己批評の瞬間がおとずれる。それは

かならずしもデカダンスや自己否定や絶望のときではない。むしろそれは熱心さと希望、誇りと喜びにみちた、真のルネッサンスだ。それは旅行し借用するだけの勇気のある強健な時代なのだ。国境の外から吹きつけてくる風を恐れるとき、文化はみずからの老衰を告白している。

そこで国々の文化のあいだに、突発的だがしかし止まることのない交流がはじまる。精神的通商のバランス・シートは急激に借方がふえてくるだろう。外国の思想や言い回しの滲透がやがて侵入に変わり、保守的な人々は世も末だと騒ぎはじめる。フランスでは、十六世紀におけるイタリア文化の侵略も、その二百年後におけるイギリスとドイツの浪曼派詩人たちへの尊敬も、また十九世紀末におけるロシアの小説家たちとスカンジナビアの劇作家たちへの熱狂も、おなじような憤慨と非難の的になった。このような反動は、それが単なる流行を、形式や小手先の芸や気取りに対する浮気っぽい好みを制御しようとしているかぎりは健全なものだ。巨匠たちは単に外国人だからという理由によって偉いのではない。しかしそれが単に新しいもの、馴染みのないものであるという理由で外国からの影響を恐れるのは間違っている。外国からの贈り物を「われわれの精神に合わない」という口実でしりぞけるのは馬鹿げている。もし本当に合わないなら、ぼくたちの精神はそれを自動的に受けつけないはずだ。十八世紀のイギリス人がフランスの理知を理解したという事実は、フランスの理知がけっして非イギリス的ではなかったことを示す。イギリスとドイツの浪曼主義は、もしフランスの土があれほど収穫に適していなかったなら、そこであれだけの実りを結ぶことはなかったろう。外国の影響はぼくたちを人工的な限界から解放し、ぼくたち自身の可能性を明らかにしてくれるにすぎない。

全面的吸収　こういう国際的な借用の過程は、さまざまの局面から成り立っているし、その全部を同一の人間が受け持つとは限らない。第一歩はもちろん外国語の習得だが、これは不可欠のものとはいえ、それだけでは不十分だ。多くの職業的語学者たち、商人たち、学者たち、教師たち、通訳たちは、直接には外国文学の普及に役立たない。それには二つのものが必要なので、もしその第一が知識であるとすれば、第二のものは鑑識力であろう。

このようにして一人のパイオニアが障壁を強行突破し、異国の宝を手に入れる。彼はそれを自国の人々へともたらすに違いない。そのことは〈翻訳〉、〈宣伝〉、〈意識的模倣〉という形でなされるが、順序はかならずしもこのとおりではない。具体的な例をあげれば、ヴォルテールは英語を知っていたし、シェイクスピアを愛読したし、シェイクスピアの存在をフランスの公衆に明らかにしたし、彼の悲劇のなかにはシェイクスピアの影響のほのかではあるが明らかな痕跡が見える。しかし、最初の翻訳は無名の三文文士ルトゥルヌールに、最初の上演用台本は今は忘れられた劇作家デュシスにゆだねられた。そしてシェイクスピアの力量がフランスに十分に感じとられたのはたっぷり一世代のち、ヴィテー、ヴィニー、デュマおよびヴィクトル・

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com